

称号及び氏名 博士（臨床福祉学） 津田 理恵子
学位記番号 甲第5号
学位授与の日付 平成22年3月24日
論文名 「懐かしい記憶から引き出す生きがい
—特別養護老人ホームにおける回想法の介入効果—」
論文審査委員 主査 武田 建
副査 太田 義弘
副査 浅野 仁

論文要旨

1. はじめに

本論文は、高齢者の福祉の実現に繋がる支援として、生活場面で専門的技術を用いて支援を展開する実践的介入により、生きる力を引き出す支援の1手法として回想法を位置づけると共に、回想法介入による介護職員の介護負担感を確認し、介護職員を取り巻く課題解決の一助とすることを目的としている。

2. 本論文の構成

序章

1. はじめに
2. 目的と方法
3. 本論文の構成

第1章 高齢者の福祉の実現(生きがい)に繋がる支援

1. 高齢期の特徴と施策
2. 高齢者の生きがい
3. 高齢者の生きがいと余暇時間の過ごし方
4. 施設入所高齢者の生きがいに関するアクティビティ・ケア

第2章 回想法

1. 回想法の概念
2. 回想法実践の実状と今後の展望

第3章 調査研究の意義と研究仮説

1. 研究の意義と目的
2. 本研究における調査項目と評価の解釈
3. 分析方法
4. 調査対象者
5. 回想法の効果測定計画
6. 仮説研究

第4章 多層ベースラインで介入したグループ回想法の効果

1. はじめに
2. 方法
3. 調査結果
4. 考察
5. まとめ

第5章 回想法実践中における行動・言動の変化(グループ毎の評価尺度の結果)

1. はじめに
2. 方法
3. 調査結果
5. 考察

第6章 対象者個別の介入効果

1. はじめに 2. 方法 3. 評価尺度の結果
4. A組5名の対象者個別の介入効果(言語的交流を中心とした介入)
5. B組4名の対象者個別の介入効果(歌と遊びを活用した介入)
6. C組4名の対象者個別の介入効果(懐かしい動作と味を取り入れた介入)

第7章 介護職員のバーンアウト-回想法の介入を試みて-

1. はじめに 2. 方法 3. 結果 4. 考察

終章 まとめと展望

1. はじめに 2. 各章のまとめと考察 3. 仮説と研究成果 4. 今後の課題と展望

上記の内容で、実証的研究として必要とされる要件を満たした構成となっている。

1. 論文内容の要旨

序章では、高齢者福祉を取り巻く課題、回想法を用いて介入する意義、目的と方法、本論文の構成について述べている。

第1章では、文献をもとに、高齢期の特徴と施策、生きがいの概念、高齢者の生きがいと余暇時間の過ごし方、施設入所高齢者の生きがいに繋がるアクティビティ・ケアについて整理し、高齢者の福祉の実現に繋がる支援について検討した結果、高齢期の特徴を踏まえ、高齢者の福祉の実現に向けた支援の方向性として、時間的流れを通した過去の懐かしい記憶に働き掛けることで、生きがい感が向上すれば、高齢者の福祉の実現に向けた支援の一手法として、臨床福祉学におけるアプローチとして大きな意義があると述べている。

第2章では、回想法の基礎的研究の文献を整理し回想法の用語の概念を整理するとともに、回想法の類型化を試み示している。その中で、類型化した細目は、回想法実践中単体で存在するのではなく複数存在し相互変容関係にあると述べている。回想法実践の実状から考えられる課題として、回想法の介入効果の測定方法が確立しているとはいえないと示している。

第3章では、特別養護老人ホームにおける回想法介入による実践研究の意義や研究プログラム、回想法の介入効果を測定する評価尺度とその解釈や分析方法、調査対象者、研究仮説を示し、本研究の位置づけを示している。

第4章では、多層ベースラインで介入し、グループ毎の評価尺度の得点を分散分析した結果、生きがい感スケール(K-1式)において有意な傾向が確認でき、多重分析の結果から全てのグループで介入直後に有意な改善が示され、回想法を用いた介入により一時的に生きがい感が改善すると示している。さらに、介入直後に全てのグループにおいて改善が確認できた評価尺度には、NMスケール(関心・意欲・交流/記録・記憶)、N-ADL(生活圏)、POMS短縮版(怒り・敵意改善)、意欲の評価(意思疎通)があり、回想法の介入によって、精神機能・感情面・身体機能・行動の改善が一時的に示され、回想法実践に使用する効果的な評価尺度が明確になったと述べている。

第5章では、回想法実践中における行動・言動の変化として、ベンダー観察記録表の1回目と4回目を比較した結果、「参加意欲・積極性」、「喜び・楽しみなどの満足度」、「回想・発言内容の質」の3項

目において、B組とC組で有意な得点の上昇が確認でき、「対人（集団）コミュニケーション」では、C組が有意に改善していた。さらに、行動観察スケールの合計得点でも、全てのグループで1回目よりも4回目に得点が増加していた。行動観察スケールを作成・使用したことで、グループ回想法参加中における参加者の行動・言動の変化を経時的に得点化して示し、回想法スクールの回を重ねるごとに参加者の人生回顧が促され、自発的な発言回数が増加していたと示している。

第6章では、13名の対象者個別の介入効果について示している。A組は、言語的コミュニケーションを中心としたグループ回想法を実践し、行動の改善が著しかった事例、辛い体験から楽しい体験を語るように変化した事例、世話好きでグループ内のリーダー的存在であった事例、スクール開催中に混乱する場面が多くみられた事例、失語症で言語によるコミュニケーションが困難な者事例の5事例について整理している。B組は、初回のスクールにおいて、参加者が個別に話し込んでしまうことが多く、グループとして言語的コミュニケーションを図ることが難しかったため、懐かしい歌や懐かしい遊びの動作を取り入れた回想法スクールを実践した。その結果、1つのテーマにそってグループ内の相互交流も自然に図れ、参加者の人生回顧も促されたと示している。そして、両耳が聞こえにくく不安を抱えていた事例、昔の遊びを通して積極的姿勢に変化した事例、脳性小児麻痺によりADL全介助で言語障害があった事例、100歳で参加した事例の4事例について整理している。C組は、認知症の周辺症状などにより言語的コミュニケーションが困難な人も含まれていたことから、昔の懐かしい動作と懐かしい味を取り入れ五感に働きかけながら回想法スクールを実践した。その結果、否定的な言動もなくなり、他者との言語的交流も円滑に図れるように変化した、認知症高齢者に潜んでいた豊かな感情が表出される効果を示している。そして、暴言から他者へのねぎらいの言葉に変化した事例、普段から発語が聞かれなかった事例、刺激材料の活用により人生回顧が引き出せた事例、身体機能に障害があったが主体的に懐かしい動作を行った事例の4事例について整理している。

第7章では、回想法介入前後に回想法を用いて介入する特別養護老人ホームで勤務している全ての介護職員にバーンアウト調査を実施し、回想法介入を試みなかった棟では、バーンアウト判定の解釈において、改善している項目や変化のなかった項目とともに悪化している項目が示された。これに対して、回想法介入を試みた棟では、情緒的消耗感得点と脱人格化得点に改善が確認でき、介護職員が回想法スクールに参加することで、利用者の情報量が増大し利用者理解が深まることから、介護職員のバーンアウトが軽減すると示している。今後、日常生活において、回想法を活用したケアを展開していくことで、質の高いケアが実現する可能性が開け、介護職員と利用者双方に相乗効果が期待できると述べている。

終章では、第1章から第7章までの成果を整理し、回想法実践を通して得られた知見をもとに、今後の課題と展望を論じている。本研究の特徴として、

1. 生きがいを感じて日々の生活を送ることが困難な傾向がある特別養護老人ホーム入所者に、グループ回想法での介入を試み、その介入効果は一時的であるが、生きがい感に影響を与えることが確認できたことである。
2. 回想法の介入効果を、多層ベースラインで検証できたことである。このことにより、現在の我が国における社会福祉領域において課題とされている深刻な高齢化や、認知症高齢者の増加などに対する支

援の在り方の一手法として、高齢者の福祉の実現に向けた支援の方向性が提案できたことである。

3. 回想法実践中の評価尺度が存在していなかったことから、行動観察スケールを作成・試用したことで、実践中の評価が経時的に得点化し把握できるようになり、今後の回想法実践の評価に役立つ評価尺度が開発できたことである。

4. 回想法の実証的研究は、確立しているとはいえない状況であったことから、回想法実践における効果的な評価尺度を示し、対象の特徴の合わせ介入手法に工夫を加えて整理したことで、今後の回想法研究の発展につながっていく結果が示せたことである。

5. 介護従事者にとっても回想法を用いることで、利用者理解が深まることやコミュニケーション能力が向上するなどの効果から、介護負担感の軽減につながる事が確認でき、介護職の離職問題などが大きな課題となっている我が国において、働きがいにつながるケアが提案できたことである。

学位申請論文審査結果の要旨

本論文は、回想法を用いて介入することで、高齢者の福祉の実現に向けた支援につながることや、介護職員の介護負担感の軽減につながるという、臨床福祉学におけるアプローチとして社会的に重要な意義がある実証的研究である。

1. 研究目的

高齢者の福祉の実現に向けて、懐かしい記憶に働きかける回想法を活用し、特別養護老人ホームで入所生活を送っている高齢者の、生きる力の源となる生きがいの向上を目指すとともに、その効果を多層ベースラインで検証することである。さらに、回想法を導入することで、介護職員の介護負担感が軽減することを検証することを目的としている。

2. 先行研究について

本論文では、高齢者の生きがいに関する文献を幅広く紹介し、回想法に関する英語・日本語の文献を克明に紹介しており、本研究への結びつきも適切かつ明瞭である。回想法については、回想法を提唱したバトラーの文献から時代を追って回想法研究の歴史的背景を整理し、用語の概念整理や類型化を試み示している。また、実証的な先行研究からその課題を整理するとともに、先行研究によって示されている効果を、実践から得られた成果と対比し考察を深めている。

3. 論旨の展開

回想法の実践を通してその介入効果を検証し、高齢者の福祉の実現につながる介入手段として、ソーシャルワークにおけるアプローチの1技法として貢献するとともに、介護職員の介護負担感の軽減に向けたケアの在り方に資するものである。その論旨を展開するにあたり、本論文では、

1. 高齢者の福祉の実現(生きがい)に繋がる支援の方向性を示し、

2. 回想法の概念整理と類型化を示し、回想法実践の実状から今後の展望を導き、
3. 回想法の介入による参加者の効果を多層ベースラインと行動観察により検証し、
4. 回想法導入による介護職員のバーンアウトの変化を明らかにし、
科学的研究方法に立脚した論文であると評価できる。

4. 研究結果

本研究第4章では、3グループに回想法の介入を試み、数種類の評価尺度を用い多層ベースラインで10ヶ月間にわたり2ヶ月ごとに5回調査を実施し分散分析を行っている。第5章では、回想法実践中における行動・言動の変化として、毎回の回想法実践におけるベンダー観察記録表、行動観察スケール、発言回数の結果をグループ毎にt検定を行っている。第6章では、対象者個別の介入効果として、A組は言語的交流を中心とした介入効果として参加者5名を個別の事例として整理し、B組は、歌と遊びを活用した介入効果として参加者4名を個別の事例として整理し、C組は、懐かしい動作と味を取り入れた介入として参加者4名の事例を整理している。第7章では、介護職員のバーンアウト得点を2年間にわたり2回調査を実施し、 χ^2 検定を行っている。その何れもが適切な処理であったと考える。

調査の結果、第4章では、介入直後に全てのグループに改善が確認できた評価尺度には、生きがい感スケール(K-1式)、NMスケール(関心・意欲・交流/記録・記憶)、N-ADL(生活圏)、POMS短縮版(怒り・敵意改善)、意欲の評価(意思疎通)があり、回想法実践に使用する効果的な評価尺度が明確になった。第5章では、ベンダー観察記録表下位項目の1回目と4回目を比較した結果、「参加意欲・積極性」、「喜び・楽しみなどの満足度」、「回想・発言内容の質」の3項目において、B組とC組で有意に得点が上昇し、「対人(集団)コミュニケーション」で、C組が有意に改善していた。さらに、行動観察スケールの合計得点でも、全てのグループで1回目よりも4回目に得点が増加し、行動観察スケールを作成・使用したことで、グループ回想法参加中における参加者の行動の変化を得点化し示すことができた。そして、回想法スクールの回を重ねるごとに参加者の人生回顧が促され、自発的な発言回数が増加していた。第6章では、A組は、行動の改善が著しかった事例、辛い体験から楽しい体験を語るように変化した事例、世話好きでグループ内のリーダー的存在であった事例、スクール開催中に混乱する場面が多くみられた事例、失語症で言語によるコミュニケーションが困難な者事例の5事例の効果を示した。B組は、両耳が聞こえにくく不安を抱えていた事例、昔の遊びを通して積極的姿勢に変化した事例、脳性小児麻痺によりADL全介助で言語障害があった事例、100歳で参加した事例について示した。C組は、暴言から他者へのねぎらいの言葉に変化した事例、普段から発語が聞かれなかった事例、刺激材料の活用により人生回顧が引き出せた事例、身体機能に障害があったが主体的に懐かしい動作を行った事例について示した。第7章では、回想法介入を試みた棟で、情緒的消耗感得点と脱人格化得点の改善を示した。

調査の結果から、懐かしい記憶に働きかける回想法は、生きがい感の向上とともに精神機能・感情面に大きな効果があり、その過程を通して、日常生活における身体機能・行動に改善が示されることが確認できた。しかし、腑活化された機能は一時的であることも示されたことから、日常生活において回想

法の技法を活用した支援を展開していくことが重要であることも明らかになった。さらに、介護職員の介護負担感の軽減につながることも確認できた。このことから、回想法を活用した支援は、臨床福祉学におけるアプローチの1手法として期待できることが明確になり、社会的に重要な意義があるといえる。

5. 内容全体への評価

本研究により、

(1)回想法を活用した介入手段は、

1)高齢者の生きがいにつながり、精神面の安定から行動が活性化されることが確認でき、抑うつや介護予防・介護の重度化を防ぐ可能性が示唆され、高齢者ソーシャルワークのアプローチの1技法として活用することで、高齢者を取り巻く課題解決の一助となる可能性が見いだせた。

2)介護職員の介護負担感軽減に効果が期待でき、ケアの質の向上につながる可能性が示唆され、介護の実践現場が抱える課題解決の一助となる可能性が開けた。

(2) 社会福祉領域において課題とされている深刻な高齢化や、認知症高齢者への支援の在り方の1手法として、高齢者の福祉の実現に向けた支援の方向性が提案できた。この知見は、高齢者領域における臨床ソーシャルワークにとって大きな指針となる。

(3)懐かしい記憶に働きかける回想法の実証的研究は、確立しているとはいえない状況であったことから、回想法実践における効果的な評価尺度を示し、対象の特徴の合わせ介入手法に工夫を加えて整理したことで、今後の回想法研究の発展に貢献できた。

(4) 回想法実践中の評価尺度が存在していなかったことから、行動観察スケールを作成・試用したことで、今後の回想法実践の評価に役立つ評価尺度が開発でき実証的研究に貢献できた。

6. 今後の課題

本研究の課題について以下の点についてまとめている。

(1)回想法の効果測定における行動観察では、トレーニングを行っていても個人の価値観によってある程度の誤差が生じることを考慮する必要があり、今後の実践における評価に向けて、トレーニングの充実を図っていくことが必要といえる。

(2)評価尺度の得点への影響として、対象者の体調の変化・家族の面会・行事への参加など、日常生活には、評価尺度の得点に影響を与えることを考慮する必要がある。

(3)今回の調査は10ヶ月間の調査にとどまっているが、一時的に腑活化した機能維持に向けた長期的な回想法の介入とその効果を検証し、介護・介護の重度化の予防効果との関係を明らかに示し、高齢者を取り巻く課題解決に向けて検証することが必要といえる。

(4)介入者の力量について評価し、対象者の人生回顧を引き出し傾聴・受容・共感できる対人支援能力を高めるトレーニング法を検討し導入していくことが必要といえる。

(5)対象者では、障害者、引きこもりなど、あらゆる年代のストレスや不安を抱えている人、抑うつ、入院患者、家族介護者などを対象とし、実践場所では、施設、病院、在宅、地域の集会所、グループホ

ームなどの在宅サービスにおける事業所、シルバーハウジングなどでその効果を検証することで、ソーシャルワーク実践において有益となる。

- (6) 回想法の認知度は低いため、研修を実施するとともに地域住民への啓発活動を行うことや、回想法実践が可能になるような、物的・人的・社会的環境を整備し回想法の普及を進めることが必要といえる。
- (7) 回想法実践中の評価として、参加者の発言内容について量的評価だけでなく質的に分析していくことが必要といえる。
- (8) ソーシャルインクルージョン、グループワークの1手法として、ソーシャルワークとの関係性について整理し、認定ソーシャルワーカー専門職の創設を視野に入れ、高齢者福祉領域のソーシャルワークの1技法として、回想法を位置づけることが必要といえる。

本研究は、課題が多い高齢者福祉の領域において、懐かしい記憶という認知に働きかける回想法を活用し、生きる力を引き出す支援としてひとつの可能性を見出した。本研究をさらに発展させ、ソーシャルワークにおいて生きる力を引き出す支援として回想法を位置づけていただきたい。

審査結果

本審査委員会は、2009年12月14日に受理された論文・申請者について慎重に審査をし、2010年2月17日に開催された公聴会および口頭試問においてさらに審議をした結果、津田理恵子氏は博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定いたしました。